

## 分裂期におけるヤルカンド・ハーン国

—— 東部政権の動向を中心に ——

白 海 提  
(バフティヤール・  
イスマーイール)

### はじめに

17世紀に入って間もなく、当時タリム盆地のオアシス全域を支配していたヤルカンド・ハーン国（カシュガル・ハーン国ともいう）<sup>1)</sup> は政治的分裂に陥った。ヒジュラ暦 1018/1609-10年<sup>2)</sup> に第四代君主ムハンマド・ハーン Muḥammad Khān（在位 1591-92～1609-10）が没するや、彼の末弟で、東部領土（チャリシュ、トルファン、コムールを中心とする地域）を支配するアブドゥッラヒーム 'Abd al-Raḥīm は中央の支配を認めず、ハーン位を争奪しようと図ったため、ハーン国の統一は破綻した。

その後、ヤルカンド・ハーン国は30年にも及ぶ長い分裂期を辿っていくことになるが、先行研究で示されているように、中央政権と東部のアブドゥッラヒーム政権には全く異なる動向が見られた。中央政権の場合、絶えない王族成員の権力闘争や頻繁なハーン位の更迭、更に宗教貴族カシュガル・ホージャ家のイスハーク派による政治への関与<sup>3)</sup> もあって、ハーンの権力が弱体化し、東部政権との対抗力も漸く衰えていった。一方東部政権のアブドゥッラ

- 
- 1) 1514年にスルターン・サイドがカシュガルで創設したこの国家はカシュガル・ハーン国の通称で知られている [間野 1977: 192; 佐口 1971: 57] が、史料に見られる用語に基づいてモグーリヤ、モグールなどとも呼ばれている [Akimushkin 1976: 12, note 1; Barthold 1962: 161]。中国の研究者はこの国家を葉爾羌汗国（ヤルカンド・ハーン国）と称している [Änwär, Khäyrinsa: 1991; 魏: 1998] が、それがスルターン・サイド以降ハーン国の政治中心がカシュガルからヤルカンドへ移転されたことに基づいている。最近日本でも「ヤルカンド・ハーン国」という名称が用いられるようになってきた [澤田 2005: 292] ので本稿においてもヤルカンド・ハーン国という称呼を使用する。
  - 2) 本稿で明示される統治者の在位年代、及び諸事件の年代は Akimushkin 1984: 159-160, 及び魏 1998 に拠った。
  - 3) カシュガル・ホージャ家がイスハーク派とアフアーク派という二つの党派に分かれることは周知の通りである。ただし、十六世紀後半にハーン国に進出し、更に分裂期を通じてヤルカンドに基盤を築いたイスハーク派に対し、アフアーク派の出現はより遅く、その根拠地カシュガルへの進出も分裂期以降、つまりアブドゥッラー・ハーンの治世中のことであった [濱田 1998: 107-108; 澤田 1996; 澤田 2005: 300-301]。従って、分裂期のヤルカンド・ハーン国の政治舞台で活動していたのはイスハーク派のみに限られる。

ヒームは中央の不安定な情勢に乗じて軍事侵攻を行ない、勢力を強めていく態勢にあった。特に彼の長男アブドゥッラー‘Abd Allāh（のちの第10代のハーン）が支配者になったのち、東部政権は直ちに完全に攻勢に転じ、終に全国のハーン位を奪うに至った<sup>4)</sup>。

分裂期におけるヤルカンド・ハーン国の政治情勢は従来の研究でも言及されてきた。特に『ターリーヒ・ラシーディー』以降のハーン国史を記録するペルシア語史料、シャー・マフムード・ビン・ミールザー・ファーズィル・チョラース Shāh Maḥmūd bin Mirzā Fāḍil Chorās 著『編年史』*Tārīkh*（仮題，以下 TShM と略記）が公刊されて以来，分裂期のハーン国史をより詳しく考察することが可能となり，新たな研究成果も発表された〔澤田 1981, 1996；魏 1998〕。ところが，今までの研究では中央内部の権力闘争とイスハーク派による政治関与の事跡のみが重点とされ，中央と対抗した東部政権の活動が極めて概説的にしか言及されておらず，その中でも若干不明瞭な点も残っていると思う。

例えば，本稿の第一章において考察するように，アブドゥッラヒームの長男アブドゥッラーが登場するまで，東部政権と中央政権は互いに戦争を起こし相手を制圧しようとしてきたが，結局どちらも相手の防御線を越えられなかった。対峙がなぜ膠着状態になっていたのかという疑問は当然生じてくるが，それが従来の研究においては明らかにされていない。この問題はアブドゥッラヒームと中央政権の対峙を考察する上で重要な鍵であり，のちの急速な統一への変化を理解するためにも不可欠であると考えられる。

また，今までの研究では，東部政権のアブドゥッラーがイスハーク派の指導者ホージャ・シャーディー Khwāja Shādī（即ち，ホージャ・ムハンマド・ヤフヤー Khwāja Muḥammad Yaḥyā）の援助によりハーン位を奪った，というのが定説となっている〔嶋田 1952：112；佐口 1971：60-61〕。確かに史料にはホージャ・シャーディーのアブドゥッラーに好意的に見える行動が記録されている。しかし，彼の行動がアブドゥッラーの勝利の決定的な動力であったかどうか，まだ検討の余地が残されていると筆者は思う。というのは，史料を改めて読む限りにおいて，ホージャ・シャーディーよりも，中央政権の軍事指導者たちの行動には特に注目すべきものがあると思われるからである。

そこで本稿では，以上の疑問点をめぐって，東部政権の動向を中心とし，分裂期のヤルカンド・ハーン国の政治情勢を考えていきたい。本稿の構成は，まず第一章においては，アブドゥッラヒームの中央との軍事対峙の実態を分析し，対峙の膠着状態をもたらした原因を考察していく。続いて第二章ではアブドゥッラーが東部政権から中央のハーン位に至る経緯に注目し，彼の諸活動が如何なる性格を持っていたのかについて検討する。

なお，本稿では TShM のほか，アキムシュキン氏の最近の研究〔Akimushkin 2001〕で公開された無名史家の『カシュガル史』*Tārīkh-i Kāshghār*（仮題，以下 TK と略記する）

4) 以上の記述は主に佐口 1971：59-61；澤田 1981；魏 1998：121-136 参照。

をも主な史料として利用する。このチャガタイ語で書かれた TK は TShM の焼き直しであると言われる [Muginov 1962: 45] にも拘らず、その中に TShM を補完する、更には TShM と異なる記述も見られるので、重要な史料として認められている<sup>5)</sup>。また、中国では TK の内容と殆ど同じ、『チンギス・ナーマ』*Chingiz Nāma* (仮題、以下 ChN と略記) と呼ばれる史料が所蔵されている。同史料はかつて現代ウイグル文字に転写されて出版された [Haji 1986] が、その存在自体が広範囲で知られていないようであり、研究にも殆ど利用されていない<sup>6)</sup>。そのため、本稿は TK を利用する際、この ChN を同時に参考することにした。

なお、引用史料訳文中の ( ) は筆者が補ったものである。

## I アブドゥッラヒームと中央政権の軍事対峙

### 1 軍事対峙の実態

東部のアブドゥッラヒームが中央に対抗し、ハーン位を争奪しようとした事情の起源は彼の兄、第四代君主ムハンマド・ハーンの時代に遡る。元々、アブドゥッラヒームはハーン国南部のサーリーグクールとワハーンに分封され、兄の即位後もその地域での統治権を承認された [TShM: 24] が、ある事件のきっかけで勢力範囲が東部に移った。TShM、及び ChN/TK での記事に従うと、その経緯は次のように概括できる。ヒジュラ暦 1003/ 1594-95 年に当時東部領土を支配していたムハンマド・ハーンの甥、婿でもあるフダーバンド・スルターン *Khudāband Sultān* は反乱をした。ムハンマド・ハーンは反乱を鎮圧するため自ら軍を率い、チャリシュを制圧したが、トルファンへの作戦は成功しなかった。翌年、ム

5) 17 世紀の終わり頃に書かれたこの史料では、ノアに関する神話、古代チュルク諸族、モンゴル族やチンギス・ハーンの軍事活動、チンギス・ハーンの子孫たちの情況、モグーリストーン・ハーン国の創設者トグルク・ティームール・ハーンの改宗物語、及び彼の子孫たちの 16 世紀初期に至る政治活動などが叙述されているが、16 世紀から 17 世紀末期までのヤルカンド・ハーン国史が詳しく記述されている。この史料に関する史料学的研究は Akimushkin 2001: 7-20 を参照されたい。

6) 筆者の知る限りでは、ChN の現代ウイグル語転写版が出版されて以来、澤田 1996 を除けば、利用されたことは殆どない。不思議なことに、この史料は中国で所蔵されているにも拘らず、中国のヤルカンド・ハーン国史に関する諸研究では利用された形跡がなく、その存在さえ一切言及されていない。

なお、ChN 転写版の編者は ChN 写本原本の最後のページ、即ち 133 a に書いてある *بوكتابت ملا مير صالح كاشغرى روز سه شنبه كوني تمام بولدى رقم ملا مير صالح كاشغرى* を根拠にして、ChN の著者を *كاشغرى* と認識したと思われる。しかし、その署名が著者の名前であるか、もしくはコピイストの名前であるかが検討の必要があると考えられるので、本稿では ChN を TK と同様に著者名不明と見なす。

本稿で使う ChN は濱田正美氏のご好意により、かつて新疆ウルムチで留学した菅原純氏によって将来されたそのコピーの複写を利用し得たものである。

ハンマド・ハーンの命令でアブドゥッラヒームは東部へ派遣され、反乱を平らげたのち、その地での統治を始めた [TShM: 29; ChN: 86 a-87 a; TK: 71 a-72 a]<sup>7)</sup>。

この事件のすぐ後と思われるが、当時ハーン位継承者の地位にいたカシュガルの支配者、ムハンマド・ハーンの長弟アブ・サイード・スルターン Abū Sa'īd Sulṭān がカシュガルで逝去した<sup>8)</sup>。ところが、ムハンマド・ハーンはハーン位継承者の位に、末弟アブドゥッラヒームではなく、自分の息子シュジャーウッディーン・アフマド Shujā' al-Dīn Aḥmad をカシュガルの支配者として任命した [TShM: 30; ChN: 87 b; TK: 72 b]<sup>9)</sup>。ムハンマド・ハーンのハーン国従来の伝統<sup>10)</sup>に違反したこの行為は彼の治世中にはアブドゥッラヒームからの明確な反対は受けなかったが、彼の死後、それが国家分裂の導火線となった。

ヒジュラ暦 1018/1609-10 年に死去したムハンマド・ハーンを継ぎ、彼の息子シュジャーウッディーン・アフマドはハーン位に就いた (在位 1609-10 ~ 1618-10)。しかし、彼の即位は東部のアブドゥッラヒームから認められず、彼の反発を惹起した。史料は、シュジャーウッディーン・アフマド・ハーンが即位すると、王族成員の一人、つまり前言及され

7) この戦争ではフダーバンド・スルターンはカルマク (オイラト) に軍事援助を求めた。カルマク軍は援助に来たが、実際には戦闘に加わらず、結局フダーバンド・スルターンを裏切った。ChN/TK はこの事件を記述するほか、ある興味深いことを伝えている。つまり、

「フダーバンド・スルターン・イブン・クライシュ・スルターンはカルマクから援助を求めた。カルマクにはある首領がいた。名前はダヴランであり、ベギーム・パードシャーの父親であった。彼はフダーバンド・スルターンを助けに来たが、援助せず、傍観した。アブドゥッラヒーム・ハーンとミールザー・シャーが勝利を得た。カルマクの首領ダヴランはトルファンの軍隊を攻撃し、略奪を行って、アブドゥッラヒーム・ハーンに服従し、自分の娘をハーンに与えた。アブドゥッラー・ハーンはこのダヴランの娘から生まれた。彼女はベギーム・パードシャーとなって、歳月を富貴と栄華と共に過ごした」というのである [ChN: 102 a; TK: 83 a-83 b]。

以上の記事によれば、アブドゥッラヒームの長男、即ちのちのハーンとなったアブドゥッラーの母方の出身はオイラトであるとされる。この記事は他の史料から確認されておらず、完全には信頼できないが、17 世紀におけるヤルカンド・ハーン国とオイラトの深い関係から考えると、その可能性が全くないとも言えない。ヤルカンド・ハーン国とオイラトの関係について、若松 1986 を参照のこと。

8) アブ・サイード・スルターンの逝去の年代は TShM において記されていない。ChN/TK は彼がカシュガルで死去したと補足しているが、具体的な時間が不詳である。魏氏は彼の死をこの事件より前に起こったと認識しているようである [魏 1998: 87] が、その根拠は判明ではない。両史料のいずれもアブ・サイード・スルターンの死をアブドゥッラヒームの東部進出に関する記事のあとで伝えている [TShM: 30; ChN: 87 b; TK: 72 b] ことから、本稿は彼の死をこの事件後に起こったと推測する。

9) この時、故アブドゥッラシード・ハーン (二代目のハーン) の 12 人の子の中に、五男のムハンマドと十二男のアブドゥッラヒーム二人だけが生きていた [魏 1998: 87]。

10) 分裂期以前のヤルカンド・ハーン国では、ハーン家内の最年長者がハーン位を継承するという伝統、もしくは制度が存在しており、更に第三代君主アブドゥルカリーム・ハーンの治世より、次代のハーン位を継承すべき者が殆どカシュガルの支配者として任命される慣習が始まった。この伝統 (制度) は TShM における記事から確認できる [TShM: 14-15, 23, 24]。

たフダーバンド・スルターンの息子ムハンマド・ハーシム・スルターン Muḥammad Hāshim Sultān が東部地方に進出し、更に東部の支配者アブドゥッラヒームと対抗するようになった、という事件を伝えている [TShM: 33; ChN: 102 b; TK: 83 b]。アブドゥッラヒームとムハンマド・ハーシム・スルターンの対峙には本稿では詳しく触れないが、まさしくこの事件をきっかけにアブドゥッラヒームが中央に対する対抗の姿勢を明らかにしたということを強調しておきたい。ChN/TK の記事を引用すると、アブドゥッラヒームがチャリシュにおいてムハンマド・ハーシム・スルターンを撃破し、彼をクチャまで追跡した時の状況が以下のように記されている。

ムハンマド・ハーシム・スルターンはクチャに逃げ、城に入り、堅固となった。(アブドゥッラヒーム・) ハーンはスルターンに使者を派遣し、以下のように伝えた。「私は反乱するためではなく、連合して先祖の土地を奪還しようと思って来たのだ」 [ChN: 102 b-103 a; TK: 84 a]。

その後、アブドゥッラヒームは降伏したムハンマド・ハーシム・スルターンを暗殺し、クチャから離れたという。

ハーン位継承者の地位を失ったアブドゥッラヒームは兄ムハンマド・ハーンの治世には異議を唱えなかったが、兄の息子が即位すると、沈黙を破った。記事に見られる「先祖の土地を奪還しよう」というアブドゥッラヒームの言辞は彼のムハンマド・ハーシム・スルターンを捕らえるための口実であったが、同時にハーン位奪還の意思明示でもあっただろう。この事件後、中央政権は直ちに討伐戦争を起し、アブドゥッラヒームを消滅させようとした。それに対しアブドゥッラヒームも積極的に対応して、中央と完全に決裂したのである。

史料の記述によって、東部のアブドゥッラヒームと中央政権の戦争がチャリシュからアクスまでの地域において行われたことは確認される (次頁の表を参照)。当時のチャリシュは東部政権の勢力範囲の最西端に位置し、当政権の中心地トルファンへの街道を扼する要衝であった。一方アクスは、中央政権の北部の要衝であるが、そこから西方へ向かうと、直ちにハーン国の第二の都会カシュガルへ進むことができる。このような戦略的な意義を持つチャリシュとアクスがそれぞれ両政権の防御線となっていたのである。

本稿は紙幅の都合で両政権の戦争を一々述べることができないが、主な戦争に関する状況を以下の表に要約してその実態を考察していきたい。

アブドゥッラヒームはハーン位奪還の意図を明言した後、2年間続いて中央政権からの攻撃を受けた。その間に、彼自身は何度もチャリシュから離れ、トルファンへ撤退したが、巧妙な防御作戦によって中央の侵攻をチャリシュ以西の地域に食い止めた。表が示す如く、シュジャーウッディーン・アフマド・ハーンとアブドゥッラティーフ・ハーン ‘Abd al-Latīf Khān (在位 1618-19 ~ 1630-31) の治世の交替期に際し、東部政権は以前と異なり、積極的に侵攻するようになった。しかし、初めて侵攻側となったアブドゥッラヒームはクチャでの初戦がまず不成功であった。彼の長男アブドゥッラーがクチャのハーキムである

戦争の時間	侵攻側	地 点	結 果	典 拠
ヒジュラ暦 1018/1609-10年 (シュジャーウッディー ン・アフマド・ハーンが 即位した直後)	中央政権	コルラとチャ リシュの中間 地帯	中央政権の軍隊はチャリシュ城 の外郭を占領したが、城内の守 備軍が死守したため、侵入でき ず、撤退。	TShM: 34-35
ヒジュラ暦 1019/1610-11年	中央政権	コルラとチャ リシュの中間 地帯	東部政権の軍隊の待ち伏せ攻撃 を受けたため、中央政権の侵攻 は失敗。	TShM: 35-36
ヒジュラ暦 1023/1614-15年	中央政権	コルラ	東部政権の軍隊が迎え撃ち、進路 を妨げたため、中央政権は撤退。	TShM: 40-41
シュジャーウッディー ン・アフマド・ハーン治 世の終わり頃	東部政権	クチャ、アクス	クチャでの戦闘で、アブドゥッ ラヒームの長男、当時7歳のア ブドゥッラーがクチャのハーキ ムであるミールザー・アブル ハーディーの詭計によって人質 にとられ、クチャへの侵攻を断 念した。その後、クチャを迂回 しアクスへ進んだが、失敗。	TShM: 54-55 ChN: 95 b-96 a TK: 78 b
ヒジュラ暦 1028/1618-19年頃 (第六代君主アブドゥッラ ティーフ・ハーンが即位 直後)	東部政権 (カザフ 遊牧集団 の軍事力 も支援し た) <sup>11)</sup>	クチャ、バイ、 アクス	クチャのハーキムであるミール ザー・アブルハーディーが人質 のアブドゥッラーの生命の安否 を盾にとって脅したため、ア ブドゥッラヒームはクチャへの侵 攻を放棄し、アクスへ進んだ。 3ヶ月間アクスを包囲したが、 アブドゥッラティーフ・ハーン の大軍に迫られて、撤退。	TShM: 55-56 ChN: 96 a-98 a TK: 78 b-80 b

ミールザー・アブルハーディー Mirzā Abū al-Hādī に人質にとられたので、クチャを放棄した。その後、彼はアクスまで進んだが、そこでの作戦は完全に失敗した。その次の戦争においてもまたミールザー・アブルハーディーからの人質に対する脅迫を受け、クチャ征服を断念したが、クチャを迂回して、アクスを包囲するに至った。ところが、包囲期間が3ヶ月にも及び、さらに中央政権の援軍も到着したため、結局チャリシュへ撤退した。また、アキムシュキンの研究によると、その以降、アブドゥッラヒームは三回にわたってアクスへ侵攻したが、いずれも失敗に終わったという [Akimushkin 1976: 301-303, note 228]。

以上述べた戦争において東部政権は殆ど不成功であったが、その攻勢は次第に強くなり、侵攻の先も段々と西部、つまり中央政権の勢力圏に侵入するようになったということは確認できる。ここで注目したいのは、ヒジュラ暦 1044/1634-35年にアブドゥッラヒームが死去するまでの両政権の対時の状況である。即ち、中央政権がチャリシュを占領することができなかったと同時に、東部政権も結局アクスを越えられなかった、ということである。両政

11) 史料によると、アブドゥッラヒームがクチャ侵攻において失敗した後、当時カザフ・ハーン国のイーシム・ハーンはアブドゥッラヒームの援助要請に応じ、タシケントからチャリシュにやってきたという [TShM: 55; ChN: 96 a; TK: 79 a]。

権がそれぞれ相手の防御線を突破することができなかった原因は何であろうか。従来保留されてきたこの問題は中央政権におけるハーン権力弱体化の問題、及びアブドゥッラヒームの軍勢力が比較的強力ではなかったという面から解釈できるかもしれないが、本稿は別の視点、つまり当時のクチャ町の特殊な位置付けから考えて試みたい。というのは、当時クチャのハーキムであったミールザー・アブルハーディーの一連の行動が両政権の軍事活動に影響を与えた可能性について検討を加える必要があると考えられる。

## 2 クチャの問題

まず、クチャのハーキム、ミールザー・アブルハーディーの経歴を簡単に見ておこう。TShMとChN/TKの記録に従うと、ミールザー・アブルハーディーなる人物は元々アブドゥッラヒームの麾下の一員であったが、恐らく中央政権の東部政権に対する第一次討伐の直後、アブドゥッラヒームを裏切り、シュジャーウッディーン・アフマド・ハーンの許へ逃亡した<sup>12)</sup>。数年後、彼はハーキム職に任じられ、前線であるクチャに派遣された [TShM: 45; ChN: 103 b; TK: 84 b]。

前節の表からも分かるが、シュジャーウッディーン・アフマド・ハーン治世の終わり頃、東部政権が初めて侵攻してクチャ城を包囲していた際、このクチャのハーキムは詭計をめぐらし、アブドゥッラヒームの長男アブドゥッラーを捕らえて人質にし、東部政権の攻撃を避けた。この人質事件によって裏切り者でもあったミールザー・アブルハーディーとアブドゥッラヒームの関係はさらに悪化した。ところが、シュジャーウッディーン・アフマド・ハーンが没するや、両者の関係は微妙に変化したのである。以下 TShM で伝えられているシュジャーウッディーン・アフマド・ハーンが死んだ後の前線の状況を見てみよう。

シュジャーウッディーン・アフマド・ハーンがこの世を去った時、アブドゥッラヒーム・ハーンは再びアクスとウチに対し進軍した。今回もまた目的を達成せずに帰った。カザフのシガーイ・ハーンの子イシーム・ハーンはタシケントからアブドゥッラヒーム・ハーンの許に来て随行した。ハーンは彼に相応しい敬意を払い、アクスに対し軍を率いた。ミールザー・アブルハーディーは（アブドゥッラヒーム・）ハーンに相応しい贈り物を送ったが、自身は（クチャ）城から出て来ず、アブドゥッラー・ハーンを城壁の上からハーンに見せた。ハーンは仕方なく、クセン（即ちクチャ）を通過して、バイの町に到着した [TShM: 55]。

---

12) ミールザー・アブルハーディーは中央政権の第一次討伐戦争の時に、東部政権側のアミールたちの一員であったが [TShM: 34]、第二次戦争の時に、中央政権のアミールとして姿を現した [TShM: 36]。更に ChN/TK によれば、彼はムハンマド・ハーシム・スルターンがクチャでアブドゥッラヒームに殺害された後、身の危険を感じて首都ヤルカンドへ去ったという [ChN: 103 b; TK: 84 b]。

この後、クチャを迂回したアブドゥッラヒームはアクスマで進軍し、そこを包囲した（前出の表参照）。

ここでミールザー・アブルハーディーのある行動に注目したい。それは、彼は人質の生命を脅かすポーズを示す一方で、アブドゥッラヒームに「相応しい贈り物」を送ったという事実である。それどころか、アキムシュキンの研究によれば、彼は東部政権のアクス侵攻に戦士を提供し、更にアブドゥッラヒームの名で貨幣を鑄造して、フトバを唱えたという [Akimushkin 1976: 301, note 224]。ミールザー・アブルハーディーはアブドゥッラヒームとの緊張関係にも拘らず、何故このような行動をしたのだろうか。

実はこの時、中央政権では重大な政治紛争が起こっている。つまり、第5代君主シュジャーウッディーン・アフマド・ハーンが軍事政変で殺害され、彼の子アブドゥッラティーフがハーン位の篡奪者クライシュ・スルターン Quraysh Sulṭān と闘っているところであった [TShM: 45-51; ChN: 90 b-94 b; TK: 74 b-78 a]<sup>13)</sup>。クチャのミールザー・アブルハーディーはまさしくこのような背景下で東部政権の侵攻に直面していたのである。混乱している中央の政局が如何に変動するのかがまだ不明瞭で、更にアブドゥッラヒームの侵攻も目の前に来たので、最前線にいたミールザー・アブルハーディーは極めて不安定な境地に陥っていたに違いない。このような事態にあった彼にとっては如何にして危機を乗り越えて、自分の安全を守るかがまず考慮しなければならない問題であったと思われる。そのために、彼は人質の存在をことさら強調すると同時に、アブドゥッラヒームに「相応しい贈り物」を送ることで、曖昧な姿勢を見せたのであろう。

ここでは、アブドゥッラヒームに戦士を提供し、さらに彼の名で貨幣を鑄造し、フトバを唱えるというミールザー・アブルハーディーの行動に注意しなければならない。この行動は彼の東部政権への服従を示すものと理解されるが、しかしその服従はあくまでも表面的であり、決して実質的なものではなかった。なぜならば、アブドゥッラヒームの長男アブドゥッラーは依然人質としてミールザー・アブルハーディーの手中にあり、アブドゥッラヒームもこの現実にも迫られて、クチャを占領することができなかったからである。その後の事情を見ても、アブドゥッラヒームは、アクス包囲戦から敗退し、再びクチャを通過した際、またもやミールザー・アブルハーディーに拒否されて、城内に入らなかった [TShM: 56]。ミールザー・アブルハーディーの行為はまさしくアキムシュキンの指摘の如く、日和見に他ならない [Akimushkin 1976: 303, note 228]。

13) ここでのクライシュ・スルターンと言う人物は故第二代君主ラシード・ハーンの孫である。彼は軍事政変でハーン位に推戴されたが、結局アブドゥッラティーフに鎮圧され、殺害された。なお、クライシュ・スルターンがアブドゥッラティーフ・ハーンに殺害されたと言う情報は ChN/TK によるものである [ChN: 94 b; TK: 78 a]。この事件に関する詳しい論述は魏 1998: 127-130 を参照されたい。



ところで、この事件後、中央政権の政局は変化し始めた。アブドゥッラヒームがアクスを三ヶ月間包囲しているうちに、中央のアブドゥッラティーフは政変を鎮圧することに成功し、ハーン位を奪ったのである（本稿の注12を参照）。彼は即位してから、直ちにアクスに向かって軍旅を起こした。結局中央の軍勢に圧迫されたアブドゥッラヒームはアクスから軍を引き揚げ、東方へ撤退した（表を参照）。

TShMによると、アクスの包囲を解いたアブドゥッラティーフ・ハーンが更に東へ進んでバイに到着し、その地の人心を落ち着かせてから、また首都ヤルカンドに帰還したという〔TShM: 56〕。しかし、ChN/TKでは別様の事情が伝えられている。

ミールザー・アブルハーディーは（アブドゥッラティーフ・）ハーンがバイに着いたことを知り、豊富な贈り物をハーンと諸貴顕達に捧げようと言って雄弁な使者（を派遣し）、ミールザー・ムハンマド・ユースフ・ベクとミールザー・クルバーン・ベクをはじめとする武将たちに贈り物を送り、以下のように伝えた。「私は殉教のハーン（シュジャーウディーン・アフマド・ハーンを指す）の下僕でした。ハーンは殉教しましたが、私は弔問に行きませんでした。陛下に拝謁することが私には必要です。しかし、今陛下の威厳を恐れていますので、拝謁できません。もし陛下が私を無き者にしないならば、それは国家に相応しくありません。陛下が私を無き者にするつもりならば、ご自由になさってください。しかし、何人かが死なないと、（私を）無き者にする事ができないでしょう。従って、陛下が撤退するならば、国家にもいいでしょう」と。ハーンはミールザー・アブルハーディーのこの要請を認め、クチャをミールザー・アブルハーディーに委ね、数多くの馬や器具を恩賜した後、バイを去った〔ChN: 98 a; TK: 80 b〕。

この記事には従来の研究で言及されていない事情が記されている。つまり、新たに即位した第6代君主アブドゥッラティーフ・ハーンはクチャのミールザー・アブルハーディーを討伐しようとしていた。史料はこの討伐の起因を明確に語っていないが、上述したミールザー・アブルハーディーの日和見的な行為が中央の討伐を招致した直接の原因であったのではないかと考えられる。ところが、結局アブドゥッラティーフ・ハーンはミールザー・アブルハーディーの饒舌に説服され、討伐を断念した。彼はミールザー・アブルハーディーのクチャでの支配権を再確定し、軍用の物資を提供してからバイを去ったのである。アブドゥッラティーフ・ハーンはなぜこの討伐を断念したのだろうか。

この時のアブドゥッラティーフ・ハーンの状態を見ると、彼は中央内部の政変を鎮圧し、ハーン位に座したばかりで、実力が十分とは言えなかった。上の記事からも判断できるように、ミールザー・アブルハーディーへの討伐をも容易に放棄したアブドゥッラティーフ・ハーンには恐らく東部政権を打倒する力もなかったと思われる。しかし、クチャのミールザー・アブルハーディーは人質によって自分を守りながら、事実上東部政権の攻勢をも牽制してきた。前で述べたように、アブドゥッラヒームはクチャを手に入れないうまま、アクスへの侵攻を試みたが、失敗した。アクス侵攻の不成功の原因には、中央からの軍事的圧迫も

ちろんあるが、クチャの征服なしに、後方が不安定のままで戦線をあまりにも延長させたアブドゥッラヒームの失策もあるだろう。上の記事によって、クチャのミールザー・アブルハーディーがハーンに対抗できる一定の軍事力を持っていたことのほか、アブドゥッラティーフ・ハーンがクチャの力を利用し、東部政権の攻勢を抑えようと図っていたということも窺えるのではないだろうか。

以上見てきたように、ミールザー・アブルハーディーは東部政権の侵攻を食い止めたのみならず、中央政権の勢力をもクチャ以西へ排斥した。史料によると、のちに彼は自分の安全をより確実に守るために、東部政権と中央政権と同時に姻親上の関係も持つようになった[ChN: 105 b; TK: 86 a]。要するに、両政権の戦争地の中間に位置するクチャはミールザー・アブルハーディーによって一種の政治的な「緩衝地帯」となり、事実両政権の侵攻を抑える役割を果たしてきた。この「緩衝地帯」クチャの存在はアブドゥッラヒームと中央政権の対峙を膠着化させた主な原因であったのではないだろうか。

## II アブドゥッラーの登場

### 1 東部政権における支配権の確立

ヒジュラ暦 1040/ 1630 - 31 年頃に中央政権のアブドゥッラティーフ・ハーンは 26 歳の若さで病死した。彼の死後程なく中央政権は再び政治動乱の渦中に巻き込まれた。彼の甥たち、フラード・ハーン Fūlād Khān (即ち、スルターン・アフマド・ハーン Suṭān Aḥmad Khān, 第一次在位 1630 - 31 ~ 1632 - 33, 第二次在位 1635 - 36 ~ 1638 - 39) とキリチ・ハーン Qilich Khān (即ち、スルターン・マフムード・ハーン Sulṭān Maḥmūd Khān, 在位 1632 - 33 ~ 1635 - 36) 兄弟はハーン位をめぐる干戈を交えた。この兄弟の権力闘争において宗教貴族イスハーク派の指導者ホージャ・シャーディーは大きな役割を演じた。この人物はシュジャーウッディーン・アフマド・ハーンの治世より新ハーン即位への関与、軍事活動に同行という政治体制に関わる活動を始めたが、フラード・ハーンとキリチ・ハーンの権力争奪の際、キリチ・ハーンの廃位と暗殺にもかかわって、内政に更に深く介入した。中央のハーン権力の弱化はこのような内部紛争によってさらに著しくなった<sup>14)</sup>。

中枢の政局がますます深刻となっている最中に、東部政権では新たな動きが見られた。それは、クチャで人質となっているアブドゥッラヒームの長男アブドゥッラーが東部政権の支配者となったことである。以下は東部政権の動向について考察しよう。

ヒジュラ暦 1044/ 1634 - 35 年に、中央と 20 年余りも抗争してきたアブドゥッラヒームは

14) 以上の中央政権の情勢、特にイスハーク派による政治関与の事跡は、澤田 1996 と魏 1998: 133 - 135 を参照されたい。

チャリシュにおいて他界し<sup>15)</sup>、この知らせが当時コムールで反乱<sup>16)</sup>を鎮圧していた彼の次男アブール・ムハンマド Abūl Muḥammad のところに届いた。ChN/TK はその後の事情を次のように記している。

アブドゥッラヒーム・ハーン——神が彼の証を照らすように——が無常の世から永遠なる庭園へ旅立ったという知らせが（アブール・ムハンマド・）ハーンに届いた。（アブール・ムハンマド・）ハーンは（反乱者のミールザー・アブドゥッラー・ベクに）使者を派遣した。ミールザー・アブドゥッラー・ベクは出て、（アブール・ムハンマド・）ハーンに謁見した。アブール・ムハンマド・ハーンはコムールをミールザー・アブドゥッラー・ベクに委ね、チャリシュへ帰還した。（アブドゥッラヒーム・）ハーンの武将たちはハーンの逝去のことを秘密にしていた。シャー・ヤーリー・ベク、ザーヒド・ベクをはじめとするすべての貴頭らは集まって、アブール・ムハンマド・ハーンをハーンの位に即けた。シャー・アーディル・ベクは（チャリシュから）逃げ出し、コルラにやってきた。コルラのミールザー・ハーシームはアブドゥッラー・ハーンとミールザー・アブルハーディーに要請した。シャー・アーディル・ベクはクチャに着いた。ミールザー・アブルハーディーはアブドゥッラー・ハーンを連れて、チャリシュに到着した [CHN: 105 a-105 b; TK: 85 b]。

つまり、父の死の知らせを得たアブドゥッラヒームの次男アブール・ムハンマドはコムールで反乱者と和解し、チャリシュへ戻って、東部政権の支配者として推戴された、以上の情報を得たクチャのミールザー・アブルハーディーは人質のアブドゥッラーを連れて、チャリシュにやって来た、というのである。

史料は突然チャリシュに姿を現したアブドゥッラーと弟のアブール・ムハンマドの間に何

15) TShM は、アブドゥッラヒームがムハンマド・ハーンの時代から東部において 40 年間独裁統治をし、70 歳を超えてこの世を去った、と記している [TShM: 61]。この記事と少し異なり、ChN/TK は彼が東部で 43 年間統治し、77 歳の時に死去したと伝えている [ChN: 105 b; TK: 85 b]。

16) TShM はこの反乱について非常に簡略に述べている。つまり、「ミールザー・ユヌス・ベクはアブドゥッラヒーム・ハーンのアミールたちの中で最も偉大なものであった。彼はカムール（即ちコムール）の町において亡くなった。彼の息子たちミールザー・アブドゥッラーとミールザー・ムナスは（アブドゥッラヒーム・）ハーンに対立し始めた。ハーンはアブール・ムハンマド・ハーンを彼らに対して派遣した」というのである [TShM: 61]。TShM の補足として、ChN/TK はこの反乱の起因をも伝えている。即ち、

「ユヌス・ベクはカムールにおいてこの世を去った。（アブドゥッラヒームはユヌス・ベクの）息子アブドゥッラー・ベクをカムールのハーキムとして任命した。ヒターイ（明朝？）からある商人が来て、カムールで死んだ。ムハンマド・アブドゥッラー・ドルゲ？はミールザー・アブドゥッラー・ベクを唆して、（商人の品物を）彼の継承者に返さなかった。商人の継承者は（アブドゥッラヒーム）ハーンに訴えた。ハーンは（カムールに）人を派遣したが、（ミールザー・アブドゥッラー・ベク）は商人の品物を返さずに、ハーンに対抗した。ハーンはアブール・ムハンマド・ハーンとシャー・ターヒル・シャーを大軍と共にカムールへ派遣した」というのである [ChN: 104 b-105 a; TK: 85 a-85 b]。

が起こったかについて語っていないが、アキムシュキン氏によると、アブル・ムハンマドは兄アブドゥッラーが到着すると、自分の意志で権力を彼に譲り、トルファンへ行ったという [Akimushkin 1976: 305, note 245]。

ここで注目したいのはクチャのハーキムであるミールザー・アブルハーディーの到来である。すでに述べたように、クチャを支配するミールザー・アブルハーディーは東部政権と中央政権の勢力を自分の支配圏から排除し、さらに政略婚姻によって両政権の侵攻を抑えてきた。彼はアブドゥッラヒームの死後、人質のアブドゥッラーをチャリシュに連れて来たが、実際に政変を企んでいたのである。以下は ChN/TK に見られるミールザー・アブルハーディー到来後のチャリシュの状況である。

(アブドゥッラヒーム・) ハーンの亡き後、チャリシュで大災難が起こった。ハーンの側近達を (ミールザー・アブルハーディーは) 殺害した。ミールザー・アブルハーディーは自分の長女をアブドゥッラー・ハーンに、もう一人の娘をフラード・ハーンに嫁がせた。もう一人の娘をアブル・ムハンマド・ハーンに (嫁にやり)、トルファンへ送った。彼はアブル・ムハンマド・ハーンを捕らえて、二人のハーン (アブドゥッラーとアブル・ムハンマドを指す) を滅ぼし、孫のヨールパルス・ハーンをハーン位に就かせ、土地を支配しようとしていた。

それに対し、アブドゥッラー・ハーンはスブハークリー・ベク、ムハンマド・ムミン・スルターン、ホージャ・アブドゥワハブ・ベク、シャー・アーディル・ベク、及びバーバーク・ベクと連合した。(彼らは) ミールザー・アブルハーディーの部下達をシャー・アーディル・ベクがイフタール<sup>17)</sup>に誘い、ミールザー・アブルハーディーをハーンがイフタールに誘うように謀議した。シャー・アーディル・ベクは (ミールザー・アブルハーディーの) 下僕を招待した。アブドゥッラー・ハーンはミールザー・アブルハーディーを自ら (彼の宿泊所に?) 入って、イフタールに誘った。

ミールザー・アブルハーディー・ベクはイフタール (の宴会場) に近づいた。ハーンは上機嫌で、出たり、入ったりしていた。(ハーンは) テーブルクロスをかけてから、外へ出て「時間になったか?」と聞いた。「時間になりました」という返事があった。アブドゥワハブ・ベクは「ハーンの命令だ!」と言って (ミールザー・アブルハーディー) に匕首を突き刺した。ミールザー・アブルハーディーはよろめき出した。アブドゥワハブ・ベクはもう一度突き刺した。ムハンマド・ムミン・スルターン、シャー・アーディル・ベク、及びバーバーク・ベクも匕首を刺した。(彼らは) ミールザー・アブルハーディーを殺した。(アブドゥッラー・ハーンは) アブル・ムハンマド

17) 断食明けの食事のこと。断食者は日没確認後にイフタールをとる。この記事の以下に見られるアブドゥッラーの「上機嫌で、出たり入ったりしていた」とか、「外へ出て時間になったのか」と聞くなどの行動は日没確認をしていたのであろう。この場合、日没がイフタール開始のしるしであり、ミールザー・アブルハーディーを暗殺するために定められた合図でもあると思われる。

ド・ハーンに人を遣わした。

ミールザー・アブルハーディーはそのすべての智略、策謀、勇猛と共に滅んだ。世界は平穩になった。ミールザー・アブルハーディーが数人に殺された後、彼の息子、娘も人の手によって殺された [ChN: 105 b- 106 a; TK: 86 a- 86 b]。

つまり、ミールザー・アブルハーディーはアブドゥッラーをチャリシュに連れてきたのち、故アブドゥッラヒームの部下たちを殺害したのみならず、アブドゥッラーとアブール・ムハンマド兄弟二人を滅ぼし、自分の孫、即ちアブドゥッラーの息子ヨールバール Yörbärs を傀儡にして、東部政権の統治権を独占しようと企んだ、アブドゥッラーはミールザー・アブルハーディーの陰謀を知り、亡父の旧臣と連合し彼とその家族皆を殺害した、ということである。

アブドゥッラーは七歳の時にミールザー・アブルハーディーに人質にとられてから、ずっとクチャにいたが、彼のそこでの活動は殆ど不明である。ただ一つの情報、つまり、彼がミールザー・アブルハーディーの婿になった、ということは先ほどの記事から確認される。史料がアブドゥッラーのクチャにおける活動を一切伝えていないことから考えると、彼はミールザー・アブルハーディーの婿になったのちにも、行動の自由が依然制限されていたと推測される。ミールザー・アブルハーディーはこのような人質身分のアブドゥッラーをチャリシュに連れて来たが、本当は彼の一族を滅ぼし、東部政権の権力を篡奪しようと企んでいた。ところが、アブドゥッラーは亡父の側近らに支持され、彼の陰謀を徹底的に打ち破ったのである。

この事件はアブドゥッラーの政治生涯において重大な意義を有すると考えられる。つまり、この事件をきっかけに、まず、アブドゥッラーは東部政権の統治権を確実に掌握するようになり、ヤルカンド・ハーン国の政治舞台に登場した。また、ミールザー・アブルハーディーの死によって、「緩衝地帯」クチャの問題も自動的に解決されたため、アブドゥッラーはクチャに至るまでの地域を完全に支配下に収めるようになった。何度も繰り返してきたように、ミールザー・アブルハーディーの本拠地クチャの存在が中央・東部両政権の侵攻を抑える主な原因として考えられる。特に東部政権のアブドゥッラヒームの場合、息子がミールザー・アブルハーディーに人質にとられたので、彼はクチャに対し手の下しようがなかった。これがアクスへの侵攻にも影響を与えたのである。ところが、このような難局はミールザー・アブルハーディーの死をきっかけに一気に打開された。この事件後、東部政権は勢力を急速に西へ拡大し、僅か四年の間に分裂の局面を転換させたのである。

## 2 アクスからヤルカンドへ

東部での支配権を樹立したのち、アブドゥッラーはチャリシュからクチャへ移動した。その際、ハーン位をめぐる闘争で弟キリチ・ハーンに破られ、アクスに亡命中のフラード・ハーンが一度空になったクチャ城を襲撃したが、アブドゥッラーの到来を知ったとたん、ア

クスへ戻った [TShM: 61]。アブドゥッラーはクチャに着いた後、側近らの提案に応じ、アクスへの進軍を決意したが、フラード・ハーン側の武将たちに密使を送り、彼らの帰順を求めることを試みた。結局、この試みが効を奏し、アクスの守備武将はアブドゥッラー側に寝返った。亡命の身であるフラード・ハーンは東部政権と対抗できるほどの軍事力を持っていなかったことに加え、自分の陣営から裏切る武将も出たため、仕方なくアクスを放棄し、首都ヤルカンドへ逃れた。かくして、アブドゥッラーは軍事力を殆ど使わずに、手軽にアクス、及びその周辺地域のすべてを手に入れたのである [TShM: 61-62; ChN: 106 b; TK: 86 b]。

今回のアクス占領は東部政権の大戦績であったと言える。なぜなら、この勝利によって中央政権の北部の防御線が完全に突破され、東部政権はその侵攻の矛先を直ちに中央政権の中心地に向けるようになったからである。以下にも述べるように、アブドゥッラーはアクスを支配下に置いたのち、その地を大本営にした。全国のハーン位に座するまでの約三、四年の間彼はずっとアクスに駐在し、そこで軍を集結させ、のちの二回のカシュガル征伐を計画・実行したのである。この点から言うと、アクス占領はアブドゥッラーの全国を統一するために踏み出した決定的な一歩であったとも言えるだろう。

では、アクス陥落後の中央政権の状況はどうなっているのだろうか。先行研究によると、フラード・ハーンはアクスを失い、首都に逃れてきたのち、弟のキリチ・ハーンからの追放令を受けたが、イスハーク派の指導者ホージャ・シャーディーとハーン叔母ハーニーム・パードシャー Khānim Pādshāh の説得によって、キリチ・ハーンに容赦された。しかし、命を守ったフラード・ハーンは表面上弟と仲良くしていたが、裏ではホージャ・シャーディーと共に政変を企んでいた。結局、キリチ・ハーンがホージャ・シャーディーのムリード(弟子)に毒殺されたのち、フラード・ハーンは再度にハーン位に戻った。彼は即位すると、その見返りに、援助者のホージャ・シャーディーに大きな寄進不動産を恩賜した。イスハーク派とハーン家の結びつきはこの事件によって更に強くなったのである [Akimushkin 1976: 306, note 252-254; 澤田 1996: 51-53; 魏 1998: 134-135]。

ところで、フラード・ハーンが即位した直後、中央政権内部では重大な事件が起こった。つまり、ヤルカンド、カシュガル、ホータンなどの主要都市にいる数多くの軍事指導者たちが一斉にフラード・ハーンを裏切り、東部政権のアブドゥッラーのもとに逃亡した<sup>18)</sup>。この軍事指導者の逃亡事件の原因は不明であるが、東部政権がアクス防御線を突破し、その勢力

18) ChN/TKによると、フラード・ハーンが再び即位すると、首都のヤルカンドからミールザー・シャー・ムハンマド・チョラース、ミールザー・ファーズィル・チョラース、ミールザー・ムラード・チョラース；カシュガルからミールザー・クジュク・チョラース、ミールザー・シャーフバズ・チョラースと彼の二人の弟、ミールザー・シャー・カーシム・オールドビギー；ホータンからミールザー・イスマーイール・オールドビギー、ミールザー・アブドゥッラフマーン・オールドビギーなどの各地の軍事指導者たちはアブドゥッラーの駐在地アクスへ逃げた [ChN: 107 a; TK: 87 a]。

が日増しに強大してゆくという現実がこの逃亡事件と何らかの関連性があると思われる。また、次の記事では故キリチ・ハーンの武将たちの反逆行動も見られる。その反逆の理由を尋ねると、フラード・ハーンが復辟したのち、かつてキリチ・ハーンを仕えた武将たちの権益を無視し大いに損害を与えたので、彼らの憎しみを招いたということが分かる。従って、フラード・ハーンの故キリチ・ハーンの部下に対する圧制もこの逃亡事件を引き起こした一原因であったと推測される。いずれにせよ、再度即位したフラード・ハーンがイスハーク派と良好関係を維持している最中に、数多くの軍指導者が彼を裏切り、敵対側に寝返ったことは明らかである。

以上のような情勢下において、既にアクスを占領したアブドゥッラーは中央政権に対する戦争を計画した。史料によると、アブドゥッラーはアクスに逃亡してきた中央政権の軍事指導者たちを受け入れ、彼らを自分の軍隊に編入し、またウチの軍隊をアクスに集結させた [ChN: 107 b; TK: 87 a-87 b]。中央政権の軍事指導者の支持を受け、戦争の勝負に過大な期待を持つようになったためか、アブドゥッラーはすべての軍隊ではなく、ただアクスとウチの軍隊のみを動員し、強力とはいえない軍事力によって第一次カシュガル征伐を始めた。

以下は従来の研究で殆ど使われていない ChN/TK の記事を利用し、第一次カシュガル征伐の状況を検討したい。ChN/TK は中央からの逃亡者も含まれる 27 人の参戦した軍事指導者の名前を列挙してから、第一次カシュガル征伐について次のように記述している。

(列挙された軍事指導者は) アブドゥッラー・ハーン——神が彼の証を照らすように——と共に大軍を率い、キズィル川を渡って、トルガーイと呼ばれる場所に下馬した。フラード・ハーンは大軍を率いて、やってきた。フラード・ハーンの軍隊の前ではアクスとウチの軍隊が弱小に見えた。アブドゥッラー・ハーン——神が彼を許されるように——は逃げようとした時に、ホージャ猊下 (即ち、ホージャ・シャーディー) ——彼の秘密が清められるように——はアブドゥッラー・ハーンに好意を示し、自分の婿パードシャー・ホージャを派遣した。

キリチ・ハーンのベク達の運勢が既に終わりになった。合理のないことが合理になって、(キリチ・ハーンのベク達は)「アブドゥッラー・ハーンは死ぬな! フラード・ハーンは我々に報復し(た)」(と言って)、(アブドゥッラー・ハーンに)道を開いた<sup>19)</sup>。アブドゥッラー・ハーン——彼の墓が照らされるように——は無事に(アクスへ)撤退した [ChN: 108 a; TK: 87 b-88 a]。

19) 下線部の ( ) にある補足は筆者が原文の文脈によって判断し補ったものである。補足した箇所が多いため、原文と対照しながら見る必要があるのではないかと考え、ここでは下線部の原文を明示しておく。

قىليچ خان نينك ببيك لارى نينك دولتى آخر بولوب ايدى نا معقول ايش معقول بولوب عبد الله خان  
يوق بولماسون فولاد خان بيزكا انتقام ياندوروب يول قويديلار

以上のChN/TKの記事によると、第一次カシュガル征伐が失敗した時に中央政権の内部からイスハーク派のホージャ・シャーディーだけではなく、故キリチ・ハーンの武将たちもアブドゥッラーに寝返った。更にこの記事で伝えられているように、アブドゥッラーが戦場で苦境に陥った時に故キリチ・ハーンの武将たちの援助を受けて、無事にアクスへ戻ったという。ところが、このChN/TKの記録は従来の研究でよく利用されてきたTShMと異なっているのである。つまり、TShMは故キリチ・ハーンの武将たちの言動に一切言及せず、敗戦したアブドゥッラーがホージャ・シャーディーの援助でアクスに戻ったと記している[TShM:62]。今までの研究においてTShMの記述が定説となっており、アブドゥッラーの最終の勝利もこのホージャ・シャーディーの援助によって実現されたと認識されている。

本稿は前の叙述においてホージャ・シャーディーとフラード・ハーンの関係について言及した。つまり、ホージャ・シャーディーは故キリチ・ハーンの暗殺に関わって、フラード・ハーンの復辟を徹底的に支持した。そのため、彼は再度即位したフラード・ハーンから膨大な寄進財産を恩賜され、ハーンとの関係を一層強めたのである。史料を観る限り、二人のこのような関係は東部政権の侵攻が開始される以前には変化しなかったようであり、更にホージャ・シャーディーがフラード・ハーンを裏切った理由も史料には見当たらない。歴代のハーンに尊崇され、ハーン家と緊密な関係を維持してきたこの宗派指導者が東部政権のアブドゥッラーに好意を示したとしても、それが中央政権との完全な決裂とは言い難い。

ところが、故キリチ・ハーンの武将たちの状況はホージャ・シャーディーと異なる。まず、彼らはフラード・ハーンの昔の敵、故キリチ・ハーンの武将という身分を持っている。彼らとフラード・ハーンの間には元々わだかまりが存在していたと考えても大きな誤りはないであろう。また、彼らがフラード・ハーンの即位後、「運勢が終わりになった」という上の記事があるが、かつてのフラード・ハーンとキリチ・ハーンの闘争の厳しさから考えると、復辟したフラード・ハーンが昔弟に仕えた者を抑圧した可能性は十分ある。従って、故キリチ・ハーンの武将たちがフラード・ハーンに恨みを抱き、彼に仕返しをしようとしたのも不思議なことではないであろう。要するに、アブドゥッラーの襲来以前における故キリチ・ハーンの武将たちとホージャ・シャーディーそれぞれのフラード・ハーンとの関係の実態は全く異なっていると考えられる。

もともとヤルカンド・ハーン国に関する史料は不十分であり、一体誰がアブドゥッラーを戦場から助けたのかという問題において敢えて断定することが出来ない。だが、信憑性がないとは言えないChN/TKの異説が存在している限り、TShMの記述を無批判的に受け入れることも困難であろう。

さて、話を敗戦したアブドゥッラーに返そう。戦場から安全にアクスに戻った後、アブドゥッラーは二度目のカシュガル征伐を計画し始めた。彼はまずトルファンに駐在している弟のアブル・ムハンマドを呼び寄せた。かつて政権を兄に譲ったアブル・ムハンマドは兄の請求に応じ、多量の贈り物を用意して、コムール、トルファン、チャリシュの軍と共に



アクスへ移動した。弟が到着すると、アブドゥッラーはまたクチャ、バイ、ウチ、ケルプインなどの各地の軍隊をアクスに集結させた。前回の征伐で失敗を経験したアブドゥッラーはこの度統治領域内の主な拠点にある軍事力を全て集中させ、第二次カシュガル征伐を決意した [TShM: 63; ChN: 108 b; TK: 88 b]<sup>20)</sup>。

ChN/TK によれば、アブドゥッラーは第二次の征伐においてカシュガルの周辺地域を占領するに至ったが、城内への侵入ができなかった。結局、彼はカシュガルとヤルカンドの間にあるヤンギヒサルスの町を襲撃し、多くの戦利品を奪って、またアクスへ収兵した。アブドゥッラーはカシュガル占領の目標を果たさないまま撤退したが、のちの事情の進展から考えると、実は今回の遠征はハーン国の分裂を完結させる最後の一戦となったのである。

アブドゥッラーが撤退して間もなく、中央政権では再び軍事指導者の逃亡事件が起こった。つまり、カシュガルの守城武将ミールザー・ヤクーブ・チョラス Mirzā Yaqūb Chorās をはじめとする多くの軍事指導者たちがフラード・ハーンを裏切ってアブドゥッラー側に逃亡した [ChN: 109 b; TK: 89 a]。TShM によると、フラード・ハーンは「武将たちの大部分がアブドゥッラー・ハーンの側に寝返ったことを知り、国を放棄し、バルフ方面へ行った」という [TShM: 63]。つまり、今回の軍事指導者たちの寝返る行動はフラード・ハーンの戦意を徹底的に破壊し、彼の亡命を促したのである<sup>21)</sup>。

その後、フラード・ハーンの亡命の情報はアクスに届いた。帰還したばかりのアブドゥッラーは弟のアブル・ムハンマドと共にまたアクスから出発し、直ちにヤルカンドへ向かった。TShM はアブドゥッラーの到来を次のように語っている。

(アブドゥッラー) ハーンはヤンギーアリクから勝利に満ちて、天国に似たヤルカンドに来た。アズィーザン猊下 (即ちホージャ・シャーディー)、アーフンド・ホージャ・ナスィール、アーフンド・ムッラ・サリーフ、及び国家の貴顕たちがハーンを迎え出た。カイマーチで出会った。ハーンを古くからの習わしに従ってハーン位に即けた [TShM: 64]。

つまり、アブドゥッラーはヤルカンドに到着し、政治・宗教の要人に推戴され、ハーン国の (第 10 代) 君主として即位した、というのである。ここで、30 年も続いたヤルカンド・ハーン国の分裂はようやく休止符を打った。それはヒジュラ暦 1048/1638-39 年のことであった。

上の記事において、アブドゥッラーの即位儀式にイスハーク派の指導者ホージャ・シャー

---

20) 以下のアブドゥッラーの第二次カシュガル遠征に関する叙述においては、主にこの戦役を比較的詳しく記している ChN/TK の記事 [ChN: 108 b-109 b; TK: 88 a-89 b] を利用する。

21) フラード・ハーンは亡命したのち、バダフシャーンを経て、マー・ワラー・アンナフルへ行ったが、最後に当時ジャーン朝のイマーム・クリー・ハーンの保護下に入った。その後、彼はジャーン朝に支援され、カシュガルに向かって軍事活動を行おうとしたが、その途中でアンディジャン人との戦いで戦死した [TShM: 63; ChN: 111 a-111 b; TK: 90 a-90 b]。

ディーの姿が現われている。澤田氏はかつて、ホージャ・シャーディーが新ハーン即位の場面に登場するのが単に宗派側からの承認を示すという程度ではなく、恐らくもっと込み入った役割を果たしていた、と指摘した [澤田 1996: 50]。ところで、ホージャ・シャーディーの影響力があくまでも中央政権の内部のみに存在しており、東部政権には及んでいなかったという事実がある以上、新たに到来したアブドゥッラーとイスハーク派の関係が如何に進展したのかという問題は当然我々の関心を引く。実はこの問題は澤田氏の最新の研究において明らかにされている。同研究によると、アブドゥッラーはイスハーク派の援助を受けて即位したにも拘らず、イスハーク派を完全に信頼していなかったという。更にその理由として、アブドゥッラーのイスハーク派の拠点ヤルカンドとの血縁上、生活上の結びつきの弱さが挙げられている [澤田 2005: 311]。筆者は先学のこの新たな見解に大いに賛成するものである。ただし、先学のこの研究にも見える、アブドゥッラーの即位がイスハーク派の援助によって実現した、という通説に対し疑問を持っているのである。言い換えれば、イスハーク派がアブドゥッラーの勝利の決定的な動力であったかどうか、検討の余地があると思う。

アブドゥッラーの経歴を振り返ると、彼がアクス占領から全国のハーン位に座するまでに中央政権の軍事指導者たちの援助を受けてきたという点が特に目に付く。既に述べたように、これらの軍事指導者の中には、フラード・ハーンとイスハーク派の関係が深くなっている最中に、アブドゥッラー側に逃亡し、更に彼のカシュガル征伐にも参加した者があれば、危険な戦場でアブドゥッラーを支持した者もある。特に第二次カシュガル征伐の直後、また多くの中央政権の軍事指導者はアブドゥッラーに寝返って、実際フラード・ハーンの亡命を促した。このような軍事指導者たちの行動は中央のハーンに大きな打撃を与えたことは言うまでもない。一方、イスハーク派のホージャ・シャーディーもアブドゥッラーに傾いたが、彼とハーン家の深い関係から考えると、それが徹底的な変節であったとは言い難い。彼は東部政権に寝返った軍事指導者たちのようにアブドゥッラーと緊密な関係を築けなかったと言わざるを得ない。アブドゥッラーの勝利は主にホージャ・シャーディーではなく、中央政権の軍事指導者たちの徹底的な援助によって実現したのではないかと考えられる。本稿のこの考えが適当であれば、即位後のアブドゥッラーがイスハーク派を完全に信頼しなかったという澤田氏の指摘をもう一つの視角からも理解できるのではないだろうか。

## お わ り に

本稿では、分裂期（1609-10～1638-39）におけるヤルカンド・ハーン国の東部政権の動向を取り上げ、当時の政治情勢に関するいくつかの具体的な問題について論じてきた。結論として以下の四点が挙げられる。

第一、アブドゥッラーが登場するまで、東部政権と中央政権はチャリシュとアクスの間地域において戦争を行ってきたが、結局どちらも相手の防御線を越えられなかった。ク

チャのハーキムであるミールザー・アブルハーディーが作り出した政治的な「緩衝地帯」、つまりクチャの存在が対峙の膠着状態をもたらした主な原因であると考えられる。

第二、ミールザー・アブルハーディーの死はアブドゥッラーの政治舞台への登場のきっかけとなったが、その死の結果、即ち「緩衝地帯」クチャ問題の解決は長い間続いてきた東部と中央両政権の対峙の局面を打開する鍵となった。

第三、宗教貴族イスハーク派の指導者ホージャ・シャーディーは東部政権の第一次カシュガル征伐中に敗戦したアブドゥッラーに傾いたが、それが徹底的な変節とは考え難い。彼は中央政権の軍事指導者のようにアブドゥッラーと緊密な関係を築かなかった。更に、この戦争で誰が敗戦したアブドゥッラーを無事救出したのかという問題については、従来知られてきたホージャ・シャーディーのほか、フラード・ハーンに抑圧された故キリチ・ハーンの武将たちによる救出の可能性も明らかに存在する。

第四、アブドゥッラーによる二回のカシュガル征伐の前後、及び最中にフラード・ハーン麾下にあった数多くの軍事指導者は相次いでアブドゥッラー陣営に寝返って、事実上中央政権の軍力は崩壊した。アブドゥッラーが最終的にハーン位を得たのは主にイスハーク派の権威によってよりむしろ、中央政権の軍事指導者の徹底的な援助によってであったと考えられる。

本稿の考察からも明らかのように、分裂期を通じて、ヤルカンド・ハーン国のハーンの権力は急速に弱化した。新たに即位したアブドゥッラーにとってハーン家の権力を回復させ、更に自分の支配権を全国範囲で確実にさせるのが当面の急務であったと思われる。史料によると、アブドゥッラーはその統治初期においてパミールのボロール地方へ遠征し、フェルガーナのオシュとアンディジャンを攻め、さらに西北部の遊牧キルギス族を討つという一連の積極的な対外戦争を敢行した。これらの対外戦争を実行するためには、アブドゥッラーが即位した後、ハーンの権力を相当な程度で回復したに違いない。では、彼は如何なる手段によってハーン権力を再樹立したのだろうか。この問題を今後解明すべき課題としたい<sup>22)</sup>。

## 参 考 文 献

ChN: 著者名不明, *Chingiz Nāma*.

中国新疆ウイグル自治区社会科学院図書館, ms. 002913.

TK: 著者名不明, *Tārīkh-Kāshghār*.

Akimushkin 2001: 84-293 のファクシミリ.

22) 本稿は、神戸大学に提出した修士論文の第一、第二章を改訂し、2005年7月16日-19日に開催された第42回日本アルタイ学会「野尻湖クリルタイ」で行なった発表をもとに作成したものである。席上、期限内に内容の全てを述べる事が出来なかったが、諸先生方から貴重なご助言を頂くことが出来、ここで記して感謝を申し上げます。

TShM Shāh Maḥmūd bin Mirzā Fāḍil Chorās, Tārīkh.

Akimushkin 1976: 校訂テキスト.

Akimushkin (1976): Акимушкин, О. Ф. Шах-Махмуд ибн Мирза Фазил Чурас, Хроника, Критический текст, перевод, комментарии, исследование и указатели О. Ф. Акимушкина, Москва.

Akimushkin (1984): Акимушкин, О. Ф. Хронология правителей восточной части Чагатайского улуса (линия Туглук-Тимур-хана), Восточный Туркестан и Средняя Азия, история, кудьтура связи. Москва.

Akimushkin (2001): Акимушкин, О. Ф. Тарих-и Кашгар, анонимная тюркская Хроника владетелей Восточного Туркестана по конец XVII века, факсимиле рукописи Санкт-Петербургского Филиала Института востоковедения Академии наук России, издание текста, введение и указатели О. Ф. Акимушкина, Санкт-Петербург.

Änwär Baytur, Khäyriṣa Sidiq (1991) Shinjangdiki millätlärning tarikhī, millätlär nāshriyati, 2-qetimliq besilishi.

Barthold, V. V. (tr. V. & T. Minorsky) (1962) History of Semirechye, *Four studies on the History of Central Asia*, 3(1), (2nd ed) Leiden.

Haji Nur Haji (1986) Chinggiz Namä Qāshqär Uyghūr nāshriyati.

濱田正美 (1998) モグール・ウルスから新疆へ——東トルキスタンと明清王朝——『岩波講座世界歴史 13 東アジア・東南アジア伝統社会の形成』岩波書店, 97-119.

間野英二 (1977) 『中央アジアの歴史』講談社.

Muginov (1962): Мугинов, А. М. Описание уйгурских рукописей Института народов Азии, Академия Наук СССР, Москва.

佐口 透 (1971) トルキスタンの諸ハン国『岩波講座世界史』13 岩波書店, 43-71.

澤田 稔 (1981) カシュガル・ハーン家とベグ達—17世紀中葉の東トルキスタン—『待兼山論叢史学編』15, 3-22.

澤田 稔 (1996) ホージャ家イスハーク派の形成——17世紀前半のタリム盆地西辺を中心に——『西南アジア研究』45, 39-61.

澤田 稔 (2005) オアシスを支配した人々——17世紀ヤルカンドの事例——松原正毅・小長谷有紀・楊海英 (編)『ユーラシア草原からのメッセージ 遊牧研究の最前線』平凡社, 290-315.

嶋田襄平 (1952) アルティ・シャフルの和卓と汗『東洋学報』34(1-4), 103-131.

若松 寛 (1986) 17世紀中葉のカルマーク族と東トルキスタン『内陸アジア研究』3, 1-12.

魏 良弢 (1998) 『叶尔羌汗国史綱』黒龍江教育出版社 第2版 哈爾濱.

(京都大学大学院文学研究科)